

CALL にたいする受講生の期待と評価

フランス語クラスのアンケート結果から

福 島 祥 行

0. CALL 教室における授業

筆者は1996年の10月より、本務校である大阪市立大学において、所謂CALL教室¹⁾での授業を行なっている。外国語教育におけるCALL教室の意義や期待については、おおむね、CHANIER(1998)、福島(1996)、三枝(1997)、藤田(1997)などに述べられているものが共通認識と考えられる。すなわち、「マルチメディア」「インタラクティブ」「個別性」「ネットワーク」「Web Pageによる素材提供」などを通じた「能動的・自律的学習」「各自ペース的学習」や「音声面の集中強化」といったものである。しかしながら、昨今急増するこのCALLにおける外国語教育の教授法はもちろんのこと、その効果や考慮点、将来的提言など、謂わば「CALLの具体的検証」の面にかんしては、まだまだ研究成果が公表されていないようである²⁾。

そこで、本小稿では、CALL検証のささやかなる試みの一つとして、筆者が担当するCALLフランス語教育の受講生たちにたいして行なってきたアンケートから、いくばくかのデータを報告し、以って、CALL外国語教育が如何なる影響を受講生たちに与え得るのかを考えるためのよすがとしたい。

1. アンケート対象クラスとその授業内容

1-1. 対象クラス

アンケートの対象としたクラス、および実施時期は以下のとおりである³⁾。

- クラスA: フランス語入門2(文学部クラス)28名[1998年7月8日]
- クラスB: フランス語初級2(文学部クラス)21名[1999年1月20日]
- クラスC1: フランス語入門2(文学部クラス)31名[1999年4月21日]
- クラスC2: フランス語入門2(文学部クラス)28名[1999年7月7日]

受講生はおおむね1回生であり⁴⁾、「入門」は初学者対象、「初級」は「入門」を通過した者が学ぶクラスである。クラスAとクラスBの受講生は1名を除き同一メンバー、クラスC1とクラスC2は、クラスCという一つのクラスに2回実施した結果を示しており、当然同一メンバーが対象となっている。

クラス A とクラス C2 は、「入門」の授業が完結する最後のコマ、すなわち前期の最終授業において、クラス B は「初級」の最後、すなわち後期最終授業においてアンケートを実施し、クラス C1 のみ、前期の授業開始後、3 回目、「LL 実験室」を利用するようになって 2 回目の授業において実施した。

したがって、クラス A は CALL 授業受講経験半年、クラス B は同一メンバーの 1 年目にたいするアンケートであり、クラス C1 は CALL 授業受講開始前、クラス C2 が開始後半年の同一メンバーにたいするアンケートということになる。

なお、いずれのメンバーにおいても、コンピュータ経験のあるものは 2 ～ 3 人に過ぎなかった。また、多くの受講生が、大学入学後 1 年以内に、「情報処理教育」という授業を受講して、初歩的なコンピュータの使い方には習熟するが、LL 実験室にけるコンピュータとの機種の違い⁵⁾、CALL 授業を受講するにあたっては、ほとんど影響を与えないものと判断した。

1-2. 授業内容

1-2-1. 「LL 実験室」の設備

まず、CALL 教室として使用されている「LL 実験室」の設備について示しておく⁶⁾。

装置	製品名	製造所	数
メインコンソール	LLC-2000M システム	SONY	1
授業支援システム	島津 SchoolTALK FlashVision 4200	島津理化器械	1
教師卓コンピュータ	PowerMacintosh 8500	Apple	1
教師卓ディスプレイ	CPD-17SF8R	SONY	1
教師卓参照用ディスプレイ	CPD-15SF8	SONY	1
学生卓コンピュータ	Macintosh Performa 6310	Apple	40
学生卓ディスプレイ	Performa ディスプレイ	Apple	40
学生卓参照用ディスプレイ	CPD-15SF8	SONY	20
レーザ・プリンタ	Laser Writer 16/1600PS	Apple	3
全世界対応ビデオデッキ	AG-W1	Panasonic	1
マルチディスクプレーヤ	MDP-A10	SONY	1
実物投影装置	VID-P100	SONY	1
テレビ・チューナー	SAT-900TV	SONY	1
アナログカセットデッキ	TC-RX300	SONY	1

なお、教師マシンの搭載メモリは 32MB、学生マシンは 16MB である。

1-2-2. クラス A

フランス語初学者向けクラスであり、学習内容は、発音・基本的文法事項・表現・読解である。大阪市立大学における英語以外の外国語⁷⁾の「入門」クラスは、週 2 コマを連

続して行なう「ペア授業」体制をとっており、一つの教科書を連続して教えてゆくことになっている。教科書は所謂「文法読本」を選択したが、ペア担当者との間で、事前に授業内容を分担し、ペア担当者が読解と表現を、筆者が文法・練習問題と発音を担当することにした。

コンピュータは、まず、黒板代わりに使用した。すなわち、文法の説明をコンピュータのディスプレイ上で行なうというものである。具体的には、文法説明や動詞の活用表など、普通教室では板書するものを、HTML ファイル⁸⁾で記述しておき、コンピュータの「ブラウザ」ソフトを用いて提示した。要するに、インターネット上に、文法説明用の Web Page を用意し、それを LL 実験室の教師マシンから接続して、学生側ディスプレイに映し出すわけである(福島 1997-1999)。

無論、単なる板書とは異なり、HTML ファイルの特性を活かして、簡単なものは、動詞変化表の活用部分をクリックすると語尾のみ色が変化するとか、さらには注意事項を示した部分が表示されるとかといった視覚的仕掛けを施してある。

文法説明と同様の頻度でコンピュータを用いたのは音声面にかんしてである。すなわち、普通教室では、カセットテープもしくは CD・MD 等で一斉に聴かせ、その回数も精々数回であった「実際のフランス語を耳にする訓練」を、受講生各自が好きだけ聴けるように工夫した。具体的には、教科書の本文をセンテンスごとに切り分けて録音したものを、Hyper Card⁹⁾上のボタンとして配置し、ボタンをクリックすると当該の音声流れるようにしたスタックを用意し、それを LL 実験室のサーバ上の学生用フォルダに転送、学生がマシンごとのフォルダからそのスタックを呼び出して、個別に参照しつつ、文章ごとの発音を各自で納得ゆくまで確認できるようにした。これは、その後、発音練習をさせることにより、聴くばかりに止まらぬよう配慮している。

さらに、ワープロ・ソフトを用いて、受講生各自に練習問題の解答をタイプさせ、誰か一人の正答を学生側ディスプレイに映し出したり、典型的誤答を映し出しつつ添削したりした。

コンピュータ以外では、ビデオ、CD、MD、教材提示装置(OHC)を用い、ビデオ教材やフレンチ・ポップス、Document authentique などを示した。

1-2-3. クラス B

本来、「初級」の授業はペア担当形式ではなく、一方が教科書を継続し、他方は新たな内容の授業を展開する方式になっているが、ペア担当者と相談して、前期と同様の方式で行く方が良いと判断した。したがって、おおむねの内容はクラス A に準ずる。ただ HTML の作り方は、Dynamic HTML¹⁰⁾や Java Script¹¹⁾の頻用によって、やや複雑さを増した。授業の最後の方では、仏検 4 級の過去問題を Java Script を用いて自己採

点可能な HTML ファイル化したものを行なわせた。

また、インターネット上から蒐集してきたフランスにかんする素材をコンピュータ上で提示した。たとえば、代表的新聞 Le Monde の第 1 面の PDF ファイル¹²⁾、テレビ局 France 3 のニュースの Real Video ファイル¹³⁾をコンピュータ上で開き、内容について簡単な解説を付けるといったものである。

さらに、CD から MP3 ファイル¹⁴⁾にした音楽を、コンピュータ上で再生した。

1-2-4. クラス C

授業の進行は、ほとんどの点においてクラス A・B に準ずる。ペアの担当箇所も、基本的に文法と練習問題である。ただし、実際に行なった内容は、異なる部分が多い。

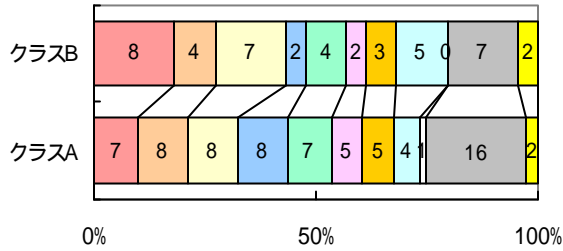
まず、練習問題が記述問題中心のパートと聞き取り問題中心のパートに分かれた教科書を採用したため、後者のパートを分担し、また文法事項が多い教科書のため、本文の聞き取り練習は割愛せねばならなかった。さらに、これも時間の都合上、記述問題にかんしてワープロ・ソフトを用いることができなかった。くわえて、聞き取り問題用の音声を、音質の点からすべて MP3 ファイルにし、Hyper Card を廃して Internet Explorer Ver.4 に対応した Dynamic HTML と、音声再生用に Quick Time Player Ver.4¹⁵⁾を用いることにした。ただし、この構成は、学生マシンのメモリ 16MB では荷が重すぎ、頻繁なフリーズを招く要因となったため、授業の最後の方では Hyper Card を用いる旧来の方式に緊急避難することになった。

またこのクラスの授業では、「サツと英作！」という英作文自習ソフト¹⁶⁾も導入し、教科書の仏作練習問題を、コンピュータ上で解かせた。さらに、毎回その時間に学ぶ文法事項に関連した歌詞を持つフレンチ・ポップスやシャンソンを MP3 ファイルで再生したが、MP3 再生ソフトである MacAmp に別機能を付加する Plug in を導入して、ディスプレイ上での歌詞の同期表示（カラオケのように色が変わる）を可能にした。このことにより、音楽・音声系はすべてコンピュータ上で再生することになり、CD は授業開始時および小テスト時の BGM のおりにしか用いず、結局 MD の使用は廃されてしまった。

2. アンケート結果

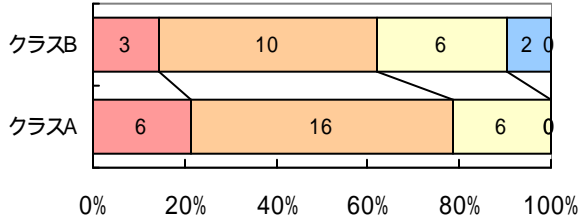
2-1. クラス A・クラス B

3-1 授業に望むこと (複数回答可能) [単位 :人]



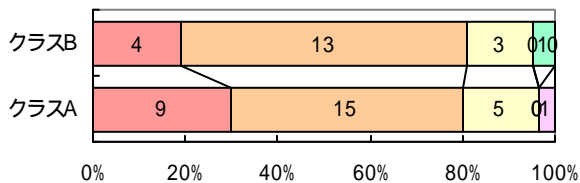
- 1 AV機器を多用してほしい
- 2 ゲーム要素を取り入れてほしい
- 3 文法に力を入れてほしい
- 4 発音に力を入れてほしい
- 5 練習問題に力を入れてほしい
- 6 コンピュータを活用してほしい
- 7 実際のフランス語のテキストの読解力養成に力を入れてほしい
- 8 ヴォキャブラリーを憶えさせることに力を入れてほしい
- 9 厳しく教へてほしい
- 10 優しく教へてほしい
- 11 その他

3-2-1 コンピュータ使用の授業内容について [単位 :人]



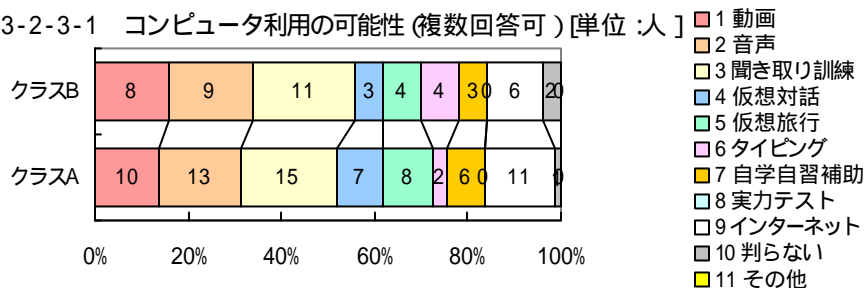
- 1 かなり面白い
- 2 やゝ面白い
- 3 Commeçi, commeça
- 4 あんまし面白くない
- 5 ちっとも面白くない

3-2-2 TA(Teaching Assistant)について [単位 :人]

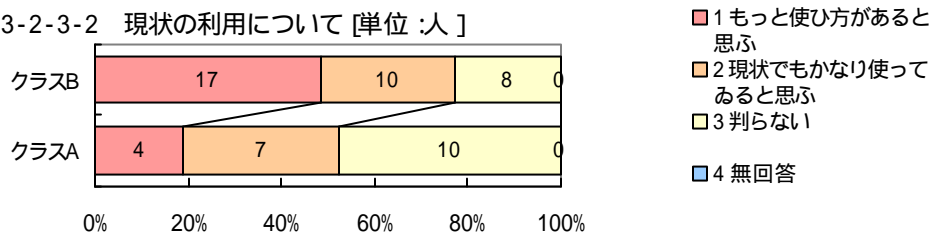


- 1 必須
- 2 あた方がよい
- 3 どっちでもよい
- 4 不要
- 5 判らない
- 6 無回答

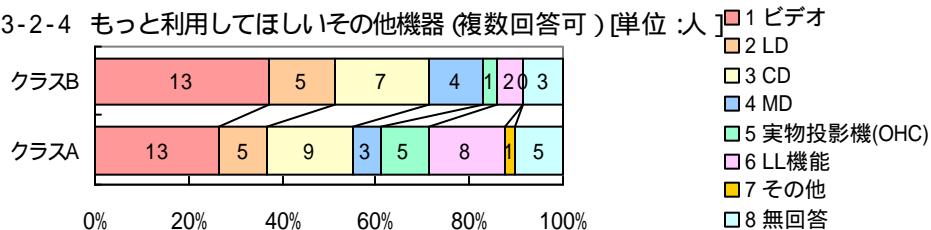
3-2-3-1 コンピュータ利用の可能性 (複数回答可) [単位 :人]



3-2-3-2 現状の利用について [単位 :人]

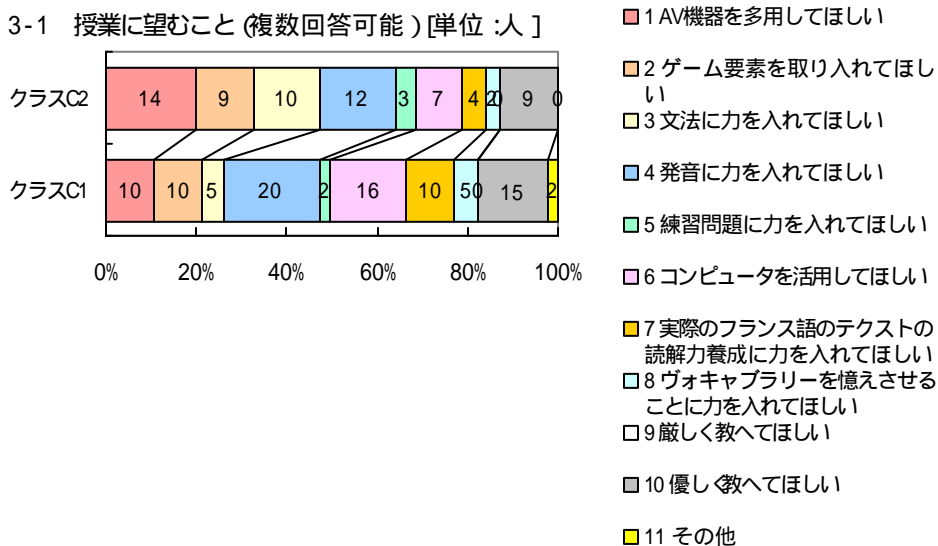


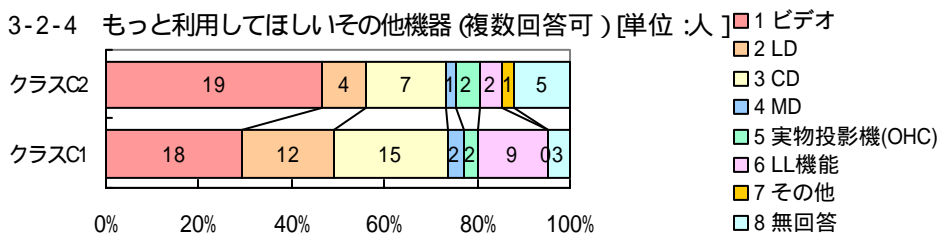
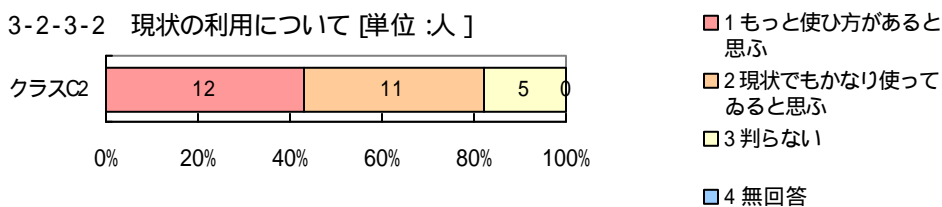
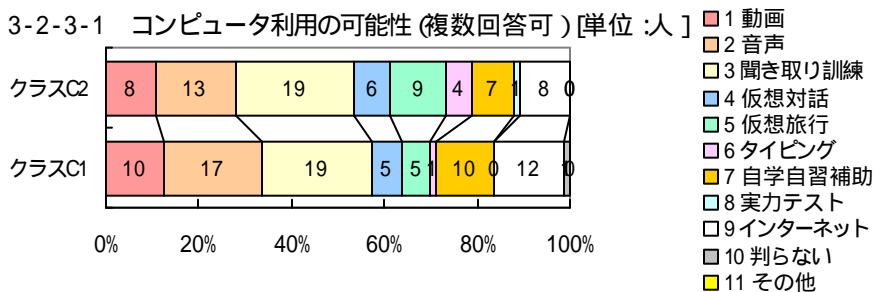
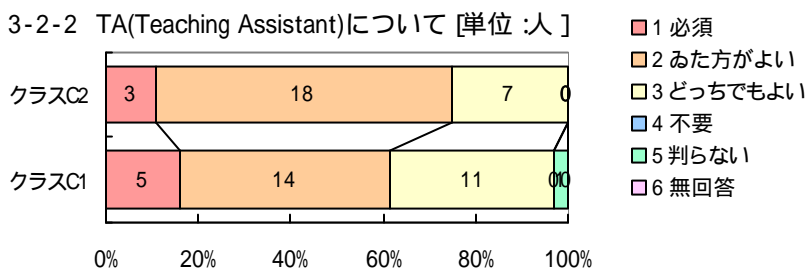
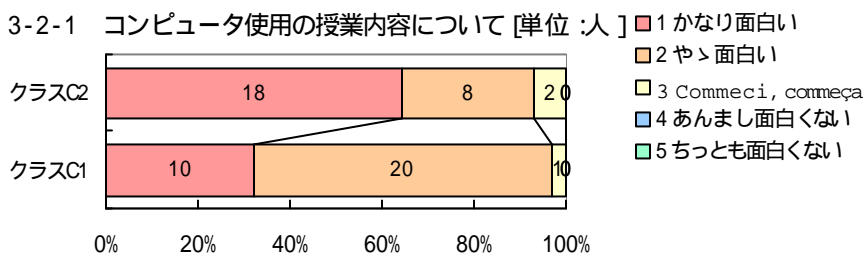
3-2-4 もっと利用してほしい其他機器 (複数回答可) [単位 :人]



2-2. クラス C1・クラス C2

3-1 授業に望むこと (複数回答可能) [単位 :人]





3. 考察

3-1. クラス A・クラス B にみる前期・後期の変化

3-1-1. 「授業に望むこと」

「10. 優しく教えてほしい」が9人減 「4. 発音に力を入れてほしい」が6人減となっているほかは、目立つ変化が見られない。後期になってようやく願いが果たされたのだろうか。とは云え、回答数ベースのパーセンテージ¹⁷⁾に直して差を求めると¹⁸⁾、いずれの項目も±10%以内に収まってしまい、さほど有意とは考えられない。

3-1-2. 「コンピュータ使用の授業内容について」

1年間の授業を通じて、フランス語の授業そのものに草臥れたのか、「2. やゝ面白い」が6人減って、「かなり面白い」との合計は、9人の減となっている。逆に、前期にはいなかった「4. あんまし面白くない」が2人現れた。とは云え、これも、パーセンテージでは±10%以内に収まってしまう数値である。なお、加重平均は、クラス A: 2.0 クラス B: 2.3 と、やや下がった。

3-1-3. 「TA(Teaching Assistant)について」

差はほとんどみられない。いずれのクラスにおいても、コンピュータ・トラブルへの対応に TA が活躍したことを踏まえていよう。

3-1-4. 「コンピュータ利用の可能性」

これも、ほとんど差がみられなかった。「9. インターネット」の減り率がやや高いのは、この年度は、LL 実験室のマシンが、自由に外部接続できなかったためかもしれない。

3-1-5. 「現状の利用について」

後期の「1. もっと使い方があると思ふ」が圧倒的に増えている。1年間LL 実験室を利用した結果、色々な可能性を感じたか、あるいはもっと使ってほしかった機能があるということであろう。

3-1-6. 「もっと利用してほしいその他機器」

主にコンピュータを用いた授業であったため、それ以外の機器について尋ねている。「6. LL 機能」が6人減であるが、これは、1年間の授業で、ほとんどコンピュータによって代用され得ることが判ったからであろうか。回答数ベースのパーセンテージでも、「6」は11ポイントの減であるが、「1. ビデオ」は、回答数は同数でありながら、パーセンテージでは13ポイントの増を示して、些か目立つ。両クラスともビデオを多用したが、そ

れが呼び水となったのかもしれない。

3-1-7. クロス集計

3-1-7-1. 「コンピュータ使用の授業内容について」と「授業に望むこと」

		かなり	や>	Comme	あんまし	ちっとも	計
AV	クラス A	2	4	2	0	0	8
	クラス B	1	*4	3	0	0	8
	%差	0.6	-3.4	-4	0	0	-6.8
ゲーム	クラス A	2	4	1	0	0	7
	クラス B	1	2	0	0	0	3
	%差	0.6	1.2	1.4	0	0	3.2
文法	クラス A	2	*5	1	0	0	8
	クラス B	2	2	2	1	0	7
	%差	-1.7	2.6	-3.1	-2.3	0	-4.5
発音	クラス A	3	*5	0	0	0	8
	クラス B	1	0	1	0	0	2
	%差	2	7.1	-2.3	0	0	6.9
練習	クラス A	1	*5	1	0	0	7
	クラス B	2	1	1	1	0	5
	%差	-3.1	4.9	-0.8	-2.3	0	-1.4
Comp	クラス A	4	1	0	0	0	5
	クラス B	0	1	1	0	0	2
	%差	5.7	-0.8	-2.3	0	0	2.6
実際	クラス A	1	3	1	0	0	5
	クラス B	0	2	1	0	0	3
	%差	1.4	-0.3	-0.8	0	0	0.3
Voc	クラス A	1	1	2	0	0	4
	クラス B	1	2	2	0	0	5
	%差	-0.8	-3.1	-1.7	0	0	-5.6
厳しく	クラス A	0	1	0	0	0	1
	クラス B	0	0	0	0	0	0
	%差	0	1.4	0	0	0	1.4
優しく	クラス A	*5	*7	4	0	0	16
	クラス B	1	*3	2	1	0	7
	%差	4.9	3.2	1.2	-2.3	0	6.9
その他	クラス A	0	0	1	0	0	1
	クラス B	0	2	0	0	0	2
	%差	0	-4.5	1.4	0	0	-3.1
計	クラス A	21	36	13	0	0	70
	クラス B	9	19	13	3	0	44
	%差	9.5	8.2	-11	-6.8	0	0

以下に示す全てのクロス集計データにおいて、クラスの単位は「人」、%差は回答数ベースのポイント差であり、マイナスになれば増えたことを示す。また、数字の前のアステリスク*は、クラスごとの上位2位までの数値である。

いずれの項目もデータ数が少ないため、確かなことは云えない。また、ポイント差も10%に満たぬものばかりであるが、いくつかの点が指摘できる。

人数比的には、両クラス間の変化はほとんどみられない。そこで、この数値を基に調整残差¹⁹⁾を求めてみると、クラスAでは「かなり&コンピュータ」の項目が有意に高く(調整残差 2.53)、コンピュータの利用を望む者が、CALL 授業にたいしても高い評価を与えていることが判る。これは至極当然のように思われるが、クラスBでは、この項目の値は0人であり、有意性を持たない(調整残差 -0.73)。クラスBで有意になった項目は存

在せず、「かなり&発音」「かなり&練習」がかすかに有意性を示しているものの、基本的には、一年間の受講の結果、授業に望む内容と授業の評価には関連がなくなるわけである。これはつまり、たとえ望みどおりの内容ではなくとも、授業にたいする満足は得られるということであろう。

3-1-7-2. 「コンピュータ使用の授業内容について」と「コンピュータ利用の可能性」

		かなり	やゝ	Comme	あんまし	ちっとも	計
動画	クラス A	3	5	2	0	0	10
	クラス B	1	*5	2	0	0	8
	%差	2	-3.3	-1.3	0	0	-2.6
音声	クラス A	2	*9	2	0	0	13
	クラス B	0	*5	3	1	0	9
	%差	2.7	2	-3.3	-2	0	-0.6
聞き取り訓練	クラス A	4	*11	2	0	0	17
	クラス B	2	*4	*4	1	0	11
	%差	1.2	6.6	-6.2	-2.3	0	-0.7
仮想対話	クラス A	5	3	0	0	0	8
	クラス B	2	1	0	0	0	3
	%差	2.7	2	0	0	0	4.7
仮想旅行	クラス A	4	3	1	0	0	8
	クラス B	2	2	0	0	0	4
	%差	1.3	0	1.3	0	0	2.6
タイピング	クラス A	2	0	0	0	0	2
	クラス B	0	2	2	0	0	4
	%差	2.7	-4	-4	0	0	-5.3
自学自習	クラス A	3	1	1	0	0	5
	クラス B	0	2	1	0	0	3
	%差	4	-2.7	-0.7	0	0	0.6
実力テスト	クラス A	0	0	0	0	0	0
	クラス B	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0
インターネット	クラス A	1	6	4	0	0	11
	クラス B	0	3	3	0	0	6
	%差	1.4	1.8	-1.1	0	0	2.1
判らない	クラス A	0	1	0	0	0	1
	クラス B	0	1	0	1	0	2
	%差	0	-0.7	0	-2	0	-2.7
その他	クラス A	0	0	0	0	0	0
	クラス B	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0
計	クラス A	24	39	12	0	0	75
	クラス B	7	25	15	3	0	50
	%差	18	2	-14	-6	0	0

全体的の比率を反映して「音声」「聞き取り」と「やゝ」の組み合わせが上位2位となっており、それはクラス A・B で同じであるが、変化の方を問えば、ポイント差はここでも10%未満にとどまる。人数比的には、「やゝ&聞き取り訓練」の7人減というのが目立つ。し

しかし、調整残差でみると、クラス A におけるこの項目は、弱い関連性を示すものの、有意ではない（調整残差 1.22）。クラス A で有意なのは「かなり&タイピング」で（調整残差 2.22）、これは、タイピングをさほど苦手としなかった者（わずかに2名であるが）、タイピング術を向上させることにより、授業にたいして満足感を抱いたのかもしれない。ところが、この項目も、クラス B では 0 人となり、有意性を失う。

クラス A で有意とまではゆかぬものの、ポイントが高かったのは、「Comme ci & インターネット」である（調整残差 1.94）。これは、CALL 授業に関心を持てなかった者は、コンピュータの可能性にたいする想像も湧かず、インターネットくらいしかイメージできなかったことを示していよう。つまり、コンピュータそのものに馴染んでいないわけである。

クラス B でも、この項目は、有意でこそないものの、かすかに関連性を示す（調整残差 1.14）。有意性を示すのは「あんまし&判らない」（調整残差 3.00）であり、コンピュータにたいして全く馴染めない者はその可能性も判らず、当然 CALL 授業も面白くないという解釈を生むが、この項目の実数は 1 人であり、データとするには不十分であろう。

一方、プラス評価の方で有意なのは、「かなり&仮想対話」（調整残差 2.81）と「かなり&仮想旅行」（調整残差 2.03）である。すなわち、CALL 授業に高評価を与える者は、コンピュータの可能性についても積極的に肯定しており、それも、外国語教育において重要でありながら、なかなか教室内一斉授業では体験しにくい面を押さえていると云えよう。

3-1-7-3. 「授業に望むこと」と「コンピュータ利用の可能性」

	AV	ゲーム	文法	発音	練習	Comp	実際	Voc	厳しく	優しく	その他	計	
動画	クラス A	3	3	3	2	3	3	2	1	1	*7	0	28
	クラス B	3	2	3	0	2	2	2	2	0	2	2	20
	%差	-1	-0.2	-1	0.9	-0.2	-0.2	-0.7	-1	0.5	1.7	-1.6	-3
音声	クラス A	3	2	4	6	4	2	1	2	1	*7	0	32
	クラス B	*4	1	*4	1	3	2	2	2	0	1	2	22
	%差	-1.9	0.1	-1.4	2	-0.6	-0.7	-1.2	-1	0.5	2.5	-1.6	-3
聞取訓練	クラス A	6	3	*7	6	6	3	5	3	0	*9	0	48
	クラス B	*5	1	*5	1	*4	2	3	3	0	2	1	27
	%差	-1.3	0.6	-0.8	2	-0.4	-0.2	-0.1	-1	0	2.6	-0.8	0.6
仮想対話	クラス A	4	2	3	4	2	4	2	1	0	6	0	28
	クラス B	1	1	1	1	2	0	0	2	0	1	0	9
	%差	1.1	0.1	0.6	1.1	-0.7	1.9	0.9	-1	0	2	0	5.8
仮想旅行	クラス A	3	3	2	2	2	4	1	1	1	6	0	25
	クラス B	2	2	1	1	2	0	0	2	0	2	0	12
	%差	-0.2	-0.2	0.1	0.1	-0.7	1.9	0.5	-1	0.5	1.2	0	2
タイピング	クラス A	0	0	1	1	1	1	1	1	0	2	0	8
	クラス B	3	0	2	1	1	1	1	1	0	2	0	12
	%差	-2.5	0	-1.2	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3	-0	0	-0.7	0	-5.9
自学自習	クラス A	1	0	3	2	2	2	2	2	0	5	0	19
	クラス B	1	1	0	0	0	0	1	1	0	2	0	6

	%差	-0.3	-0.8	1.4	0.9	0.9	0.9	0.1	0.1	0	0.7	0	3.9
実力テスト	クラス A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クラス B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
インターネット	クラス A	2	4	2	2	2	1	1	0	1	6	1	22
	クラス B	*4	2	0	0	0	2	0	0	0	*4	1	13
	%差	-2.3	0.3	0.9	0.9	0.9	-1.2	0.5	0	0.5	-0.4	-0.3	-0.2
判らない	クラス A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	クラス B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	%差	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-0.3	0	-0.3
その他	クラス A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.7	0	0.7
	クラス B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.3	0	0.3
計	クラス A	22	17	25	25	22	20	15	11	4	49	1	211
	クラス B	23	10	16	5	14	9	9	13	0	17	6	122
	%差	-8.4	-0.1	-1.3	7.7	-1	2.1	-0.3	-5	1.9	9.3	-4.4	0.1

数値的にはほとんど変化が見られないと云ってよい。目立つのは「優しく&聞取訓練」の7人減であるが、これは、クラス Bにおいて「優しく」が大きく減少していることと関連していよう。そもそもクラス Aにおける有意度はないに等しい(調整残差 -0.83)。ただし、クラス Bにおける関連性はややあるので(調整残差 -1.11)、「聞き取りに力を入れてほしい学生は、優しく教えてもらわずともよい」あるいは「優しく教えてほしい学生は聞き取りに力をいれてもらわずともよい」という傾向にあるとも云える。すなわち、一年間CALL授業のメインとして聞き取りを行ない続けた結果、それに馴染めなかった学生が、もっと優しく教えてほしいと感じているわけである。

さて、調整残差でみると、クラス Aでは「その他&インターネット」のみが有意性を示す(調整残差 2.94)。だが、回答数では1人に過ぎず、その記述内容も「フランス映画を見たい」というもので、インターネットと関連した内容とは考えられない。したがって、この有意性はあまり意味がない。

一方、クラス Bでは、「優しく&判らない」が有意性を示す(調整残差 2.50)。が、これも回答数では1人であり、あまり意味が認められない。ただし、この項目は、クラス Aにおいても調整残差 1.82 でやや有意性を示しており、コンピュータに馴染めなかった学生が、とりあえず「優しく教えてほしい」と考えることには妥当性があると云えよう。

また、クラス Bにおいて2番目の有意性を示すのは「優しく&インターネット」である(調整残差 1.85)。「インターネット」と希望授業内容との関連を探ると、クラス Aでは「その他」を除けば、「ゲーム」との間にやや関連性を示すのみ(調整残差 1.84)なのに対し、クラス Bでは、「AV」「コンピュータ」との間にかすかに関連性がみえる(調整残差 1.16と1.17)。これはつまり、当初は「インターネット=楽しい」イメージであったものが、はっきりと「インターネット=視聴覚データ・コンピュータの典型的利用法」というイメージ

が固まってきたことを示していると考え、「優しく教えてほしい」すなわちあまり「コンピュータに馴染めない」学生も、インターネットなら受け入れられるとなったことを示しているのではなからうか。

3-1-7-4. 「もっと利用してほしいその他機器」と「コンピュータ利用の可能性」

		ビデオ	LD	CD	MD	OHC	LL 機能	その他	無回答	計
動画	クラス A	3	4	5	2	5	3	0	1	23
	クラス B	5	2	3	1	0	1	0	2	14
	%差	-3.7	0.3	-0.2	0.1	3.1	0.8	0	-1.6	-1.2
音声	クラス A	*8	4	4	1	1	4	0	2	24
	クラス B	*8	3	2	1	0	1	0	1	16
	%差	-3.9	-0.8	0.3	-0.5	0.6	1.4	0	0.1	-2.8
聞取訓練	クラス A	*7	4	*7	3	2	6	0	4	33
	クラス B	*7	3	3	2	0	1	0	2	18
	%差	-3.4	-0.8	1.1	-0.3	1.3	2.7	0	0.3	0.9
仮想対話	クラス A	6	4	4	2	4	5	0	0	25
	クラス B	2	1	1	2	0	0	0	0	6
	%差	1.6	1.4	1.4	-1	2.5	3.1	0	0	9
仮想旅行	クラス A	4	4	3	1	3	3	0	0	18
	クラス B	2	1	2	2	0	0	0	0	7
	%差	0.3	1.4	-0.3	-1.6	1.9	1.9	0	0	3.6
タイピング	クラス A	1	1	2	1	1	1	0	0	7
	クラス B	4	2	2	1	0	0	0	0	9
	%差	-3.8	-1.6	-1	-0.5	0.6	0.6	0	0	-5.7
自学自習	クラス A	2	1	2	1	1	3	0	1	11
	クラス B	0	0	3	1	1	0	0	0	5
	%差	1.3	0.6	-2.1	-0.5	-0.5	1.9	0	0.6	1.3
実力テスト	クラス A	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クラス B	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0	0	0	0
インターネット	クラス A	3	3	4	1	3	1	1	1	17
	クラス B	5	3	3	1	0	1	0	0	13
	%差	-3.7	-1.4	-0.8	-0.5	1.9	-0.5	0.6	0.6	-3.8
判らない	クラス A	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	クラス B	1	0	0	0	0	0	0	1	2
	%差	-1.1	0	0	0	0	0	0	-0.5	-1.6
その他	クラス A	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クラス B	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	クラス A	34	25	31	12	20	26	1	10	159
	クラス B	34	15	19	11	1	4	0	6	90
	%差	-16.4	-0.9	-1.6	-4.7	11.5	11.9	0.6	-0.4	0

人数比的には目立った変化が見られない。上位2位の項目もほとんど一緒である。調整残差で見ると、クラス A では「その他&インターネット」（調整残差 2.90）「無回答&判らない」（調整残差 3.87）が、クラス B では「CD&自学自習」（調整残差 2.19）「OHC

& 自学自習」(調整残差 4.15)「無回答&判らない」(調整残差 2.48)が有意性を示した。

いずれのクラスでも有意となった「無回答&判らない」は、どちらも実数 1 人であり、データとはしがたい。しかし、コンピュータに馴染めなかった学生が、CALL 教室の全般に関心が持てなかったということは、充分あり得ることであろう。

クラス A の「その他&インターネット」の実数は 1 人であり、記述欄も空白であったため、データとはしにくい。

クラス B の「OHC & 自学自習」も実数は 1 人である。OHC(実物投影機)と自学自習補助の間柄を考えると、(1)「フランスにかんする生データをもっと見たい」という者はコンピュータ裡の「仮想データ」にさほど関心がなく、「ドリル・マシン」としてしか考えられない、もしくは、(2)「フランスにかんする生データをもっと見たい」という者は、「コンピュータを利用して、もっとフランス語力を高めたいと考えている」という二方向の解釈が可能となる。そしてこの解釈は、実数 3 人の「CD & 自学自習」のケースにも当てはまる。CD によって聞きたいのは、当然「フランスの歌」という「生データ」だからである。いずれの方向性かは、判断材料が乏しいため、決定できない。

総体に、クラス A・B においては「もっと利用してほしいその他機器」と「コンピュータ利用の可能性」との間には、有意な連関が認めにくく、したがって変化も判定しがたいと云えよう。

3-2. クラス C1・クラス C2 にみる期待・願望の変化

3-2-1. 「授業に望むこと」

「4. 発音に力を入れてほしい」が 8 人減、「6. コンピュータを活用してほしい」が 9 人減、「7. 実際のフランス語のテキストの読解力養成に力を入れてほしい」と「10. 優しく教えてほしい」が共に 6 人減である。いずれも、実際に授業を受けてみたら希望が満たされた、ということなのかもしれないが、回答数ベースのパーセンテージに直してみると、いずれも $\pm 10\%$ 以内に収まる数値である。むしろ、その数値でみると、「1. AV 機器を多用してほしい」が 10 ポイント、「3. 文法に力を入れてほしい」が 9 ポイントと、わずかながら増加を示している。これは、実際の授業を受けた結果、「文法が意外と判りにくくて困った」「AV 機器の利用がコンピュータに比して少ない」というように感じたためではなからうか。

3-2-2. 「コンピュータ使用の授業内容について」

「3. Comme ci, comme ça」が 1 人増加したとは云え、多くが、「2. やゝ面白い」という予想から、実際には「1. かなり面白い」という感想に転じたと思われる。パーセンテージの

比較でみると、「2.」が36%減「1.」が32%の増。加重平均も、クラス C1: 1.7 クラス C2: 1.4 と、もともと良い評価であったが、些かながらも、さらなるアップを示した。

3-2-3. 「TA(Teaching Assistant)について」

これも亦、数々のコンピュータ・トラブルを経験したためか、総体に必要性を認める結果となった。

3-2-4. 「コンピュータ利用の可能性」

いずれの項目も、ほとんど変化がみられず、前期の授業を受けたのみでは、さほどコンピュータ観に変化がなかったことを示している。ただし、回答数ベースのパーセンテージでみると、「5. 仮想旅行」が8ポイント増えており、最も大きな差を示している。とは云い条、大きな差ではないことも確かである。

3-2-5. 「現状の利用について」

クラス C1 にかんしては、LL 実験室をまだ一度も利用していない段階であり、この設問にたいして答えられるはずがないため割愛した。したがって、クラス C2 についてのみの結果となっている。

結果は、「1. もっと使い方があると思ふ」と「2. 現状でもかなり使っていると思ふ」が拮抗した。

3-2-6. 「もっと利用してほしいその他機器」

回答数的には、「2. LD」「3. CD」の8人減、「6. LL 機能」の7人減が目立つものの、回答数ベースのパーセンテージでは、いずれも圧縮されて10%以内の減に収まってしまふ。それに対し、「1. ビデオ」は、回答数ではわずか1人の増に過ぎないが、回答数ベースのパーセンテージでは、17%の増となって、突出している。これは、このクラスにおいて、ビデオを利用する機会が少なかったためであろう。

3-2-7. クロス集計

3-2-7-1. 「コンピュータ使用の授業内容について」と「授業に望むこと」

		かなり	やゝ	Comme	あんまし	ちっとも	計
AV	クラス C1	4	5	1	0	0	10
	クラス C2	*11	3	0	0	0	14
	%差	-11.5	0.9	1	0	0	-9.6
ゲーム	クラス C1	3	6	1	0	0	10
	クラス C2	7	1	1	0	0	9
	%差	-6.9	4.8	-0.4	0	0	-2.4

文法	クラス C1	1	4	0	0	0	5
	クラス C2	6	3	1	0	0	10
	%差	-7.5	-0.1	-1.4	0	0	-9.1
発音	クラス C1	8	*12	0	0	0	20
	クラス C2	*10	2	0	0	0	12
	%差	-6	9.6	0	0	0	3.7
練習	クラス C1	1	1	0	0	0	2
	クラス C2	1	2	0	0	0	3
	%差	-0.4	-1.8	0	0	0	-2.2
Comp	クラス C1	7	*9	0	0	0	16
	クラス C2	7	0	0	0	0	7
	%差	-2.7	9.4	0	0	0	6.7
実際	クラス C1	2	8	1	0	0	11
	クラス C2	2	2	0	0	0	4
	%差	-0.8	5.5	1	0	0	5.7
Voc	クラス C1	2	3	0	0	0	5
	クラス C2	1	1	0	0	0	2
	%差	0.7	1.7	0	0	0	2.4
厳しく	クラス C1	0	0	0	0	0	0
	クラス C2	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0
優しく	クラス C1	5	*9	1	0	0	15
	クラス C2	8	1	0	0	0	9
	%差	-6.2	7.9	1	0	0	2.8
その他	クラス C1	0	2	0	0	0	2
	クラス C2	0	0	0	0	0	0
	%差	0	2.1	0	0	0	2.1
計	クラス C1	33	59	4	0	0	96
	クラス C2	53	15	2	0	0	70
	%差	-41.3	40	1.3	0	0	0

人数比的には、「かなり&AV」と「かなり&文法」が大きく増え、「や>&発音」「や>&優しく」など「や>」の系列が軒並み減少している。これは勿論、半年間CALL授業を実際に受講することによって「や>」から「かなり」に転じた者が多かったためである。また、「AV」にたいする要求が増えたのは、このクラスではあまりビデオを利用する機会がなかったためもあるが、クラス A・B でも同様であったことから、受講生たちは本来的に「AV 機器の多用」を望んでいるのであろう。

調整残差で見ると、有意性を示す項目は一つもなく、関連性は薄いと考えられる。クラス C2 において、「かなり&コンピュータ」が弱い有意性を示しているが(調整残差 1.58)、これはクラス A の場合と同じであり、半年間の CALL 授業の成果と云えるかもしれない。

結局のところ、クラス A・B において観察された結果と同様、授業の内容とその評価には関連性が認めにくいと云えよう。

3-2-7-2. 「コンピュータ使用の授業内容について」と「コンピュータ利用の可能性」

		かなり	やゝ	Comme	あんまし	ちっとも	計
動画	クラス C1	5	7	0	0	0	12
	クラス C2	5	2	1	0	0	8
	%差	-0.6	5.9	-1.3	0	0	4
音声	クラス C1	6	*11	0	0	0	17
	クラス C2	*12	1	0	0	0	13
	%差	-8.7	12.1	0	0	0	3.4
聞取訓練	クラス C1	7	*12	0	0	0	19
	クラス C2	*15	3	1	0	0	19
	%差	-11.5	10.6	-1.3	0	0	-2.2
仮想対話	クラス C1	3	2	1	0	0	6
	クラス C2	5	1	0	0	0	6
	%差	-3	1.1	1.2	0	0	-0.7
仮想旅行	クラス C1	2	1	0	0	0	3
	クラス C2	5	3	1	0	0	9
	%差	-4.2	-2.8	-1.3	0	0	-8.3
タイピング	クラス C1	0	2	0	0	0	2
	クラス C2	2	0	2	0	0	4
	%差	-2.7	2.4	-2.7	0	0	-3
自学自習	クラス C1	4	6	0	0	0	10
	クラス C2	4	3	0	0	0	7
	%差	-0.5	3.3	0	0	0	2.8
実力テスト	クラス C1	0	0	0	0	0	0
	クラス C2	0	1	0	0	0	1
	%差	0	-1.3	0	0	0	-1.3
インターネット	クラス C1	4	7	1	0	0	12
	クラス C2	6	1	1	0	0	8
	%差	-3.1	7.2	-0.1	0	0	4
判らない	クラス C1	0	1	0	0	0	1
	クラス C2	0	0	0	0	0	0
	%差	0	1.2	0	0	0	1.2
その他	クラス C1	0	0	0	0	0	0
	クラス C2	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0
計	クラス C1	31	49	2	0	0	82
	クラス C2	54	15	6	0	0	75
	%差	-34.2	39.8	-5.6	0	0	0

人数比的には、このクロス項目も、上の場合と同様、「やゝ」から「かなり」に転じた者が多いため、「かなり」系列の増加が目立つ。上位2項目も、「音声」「聞き取り」がそっくり移動した結果になっている。

調整残差で見ると、クラス C1 では「Comme ci & 仮想対話」（調整残差 2.99）、クラス C2 では「やゝ & 実力テスト」（調整残差 2.01）「Comme ci & タイピング」（調整残差 3.33）が有意性を示しているが、最後の項目のみ実数2人、あとはいずれも1人ずつで、これも少数回答ゆえの有意性であることが判る。とは云え、クラス C2 の「Comme ci & タ

「タイピング」は CALL 授業にあまり馴染めなかった学生も、タイピングという具体的な技術にかんしてはその有効性を認めているということは、充分考え得る。

有意ではないものの、クラス C2 の「かなり&音声」(調整残差 1.76) もやや高めの関連性を示す。これは勿論、CALL 授業において音声を中心に扱ったためであろうが、その授業の結果 CALL に対する評価が上がったと判断できよう。

3-2-7-3. 「授業に望むこと」と「コンピュータ利用の可能性」

		AV	ゲーム	文法	発音	練習	Comp	実際	Voc	厳しく	優しく	その他	計
動画	クラス C1	4	5	2	9	0	7	1	2	0	7	1	38
	クラス C2	5	3	0	4	1	3	1	1	0	3	0	21
	%差	-0.9	0.5	0.8	1.5	-0.5	1.2	-0.1	0.3	0	1.2	0.4	4.4
音声	クラス C1	7	4	2	*12	1	*13	5	2	0	9	1	56
	クラス C2	*10	6	2	6	1	6	1	1	0	6	0	39
	%差	-2.1	-1.3	-0.2	1.7	-0.1	2.1	1.4	0.3	0	0.6	0.4	2.8
聞取訓練	クラス C1	5	5	2	*12	1	10	5	4	0	9	2	55
	クラス C2	*10	7	7	*9	1	5	3	2	0	7	0	51
	%差	-2.8	-1.4	-2.6	0.3	-0.1	1.4	0.5	0.6	0	0.1	0.8	-3.2
仮想対話	クラス C1	3	5	0	2	0	3	1	1	0	5	1	21
	クラス C2	4	2	2	5	0	3	1	1	0	3	0	21
	%差	-0.8	0.9	-0.9	-1.6	0	-0.3	-0.1	-0	0	0.5	0.4	-2
仮想旅行	クラス C1	2	2	0	1	0	2	0	0	0	3	0	10
	クラス C2	5	3	3	6	0	2	1	0	0	3	0	23
	%差	-1.6	-0.7	-1.4	-2.5	0	-0.2	-0.5	0	0	-0.3	0	-7.2
タイピング	クラス C1	1	1	0	1	0	2	2	1	0	2	0	10
	クラス C2	1	3	1	0	0	2	0	1	0	1	0	9
	%差	-0.1	-1	-0.5	0.4	0	-0.2	0.8	-0	0	0.3	0	-0.4
自学自習	クラス C1	3	1	0	6	1	7	3	2	0	5	1	29
	クラス C2	4	2	1	2	2	3	1	1	0	2	0	18
	%差	-0.8	-0.6	-0.5	1.3	-0.6	1.2	0.7	0.3	0	0.9	0.4	2.3
実力テスト	クラス C1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クラス C2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3
	%差	0	0	0	0	0	0	-0.5	-1	0	-0.5	0	-1.5
インターネット	クラス C1	6	5	1	9	1	7	6	3	0	5	0	43
	クラス C2	4	3	2	4	0	4	2	2	0	5	0	26
	%差	0.4	0.5	-0.6	1.5	0.4	0.8	1.3	0.2	0	-0.5	0	4
判らない	クラス C1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
	クラス C2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0.4	0	0	0	0.4	0	0	0	0	0.8
その他	クラス C1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クラス C2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	クラス C1	31	28	8	52	4	51	24	15	0	45	6	264
	クラス C2	43	29	18	36	5	28	11	10	0	31	0	211
	%差	-8.6	-3.1	-5.5	2.6	-0.9	6	3.9	0.9	0	2.4	2.3	0

人数比的には、「AV & 音声」「AV & 聞取訓練」が高い伸びを示しているが、調整残

差で見ると、両項目とも、いずれのクラスにおいても、ほとんど関連性を示さない。関連性を示すのは、クラス C1 において「ゲーム&仮想対話」（調整残差 2.05）「文法&判らない」（調整残差 3.89）「実際&判らない」（調整残差 2.02）、クラス C2 において「練習&自学自習」（調整残差 2.55）「実際&実力テスト」（調整残差 2.21）「ヴォキャブラリー&実力テスト」（調整残差 2.35）である。

クラス C1 における「文法&判らない」「実際&判らない」はいずれも実数 1 人であり、また両項目の回答者は同一人物であるため、判断材料としがたいが、CALL 授業を受けていない段階で、コンピュータに馴染みのない者が「文法」「実際のフランス語のテキストの読解力養成に力を入れてほしい」という「受験外国語的発想」に到るのは、至極当然とも云い得よう。

他方、実数 5 人の「ゲーム&仮想対話」にかんしては、コンピュータの可能性を「楽しい」、まさにテレビゲームやゲームセンター的な「ゲーム感覚」で捉えている結果と看做し得る。

クラス C2 の「実際&実力テスト」「ヴォキャブラリー&実力テスト」も亦、実数 1 人ずつ且つ両項目の回答者が同一人物であり、判断材料としがたいが、ここでも亦、両項目が「テキスト読解」と「テスト」という「受験外国語的発想」で括り得る点、注目に値するかもしれない。なお、この回答者は「動画」「聞取訓練」「インターネット」も選択していることから、コンピュータにかんしては些か受け身のイメージが感じられる。

「練習&自学自習」も実数は 2 人のみであるが、「自学自習補助」を「コンピュータは単なるドリル・マシン」と考えるならば、またしても「受験外国語的発想」に辿り着くことになる。

クラス C1 における「ゲーム感覚」は、クラス C2 に到って消えるわけではない。「ゲーム&タイピング」の項目は、弱い関連性を示している（調整残差 1.74）。すなわち、ゲームの実現し得る場を、「仮想対話」という未だ実現されざる要素から、「タイピング」という授業中に体験済みの具体的要素へと移したわけである。

一方で、クラス C1 において弱い関連性を示す「実際&タイピング」（調整残差 1.22）「実際&インターネット」（調整残差 1.21）という「受験外国語+コンピュータの一般的イメージ」は、CALL 体験を経て消え去る（クラス C2 ではそれぞれ -0.72 と 0.61）。代わって弱い関連性を示すのは、「文法&聞取訓練」（調整残差 1.53）「発音&仮想旅行」（調整残差 1.22）という、フランス語学習における「現実的に取り組まねばならぬ課題」と、「フランスに行つて会話をするという願望」である。これは要するに、当然過ぎることながら、CALL 授業がコンピュータにたいする認識をはっきりさせ、受講生の希望に合わせた利用法をイメージできるようにした、ということであろう。

3-2-7-4. 「もっと利用してほしいその他機器」と「コンピュータ利用の可能性」

		ビデオ	LD	CD	MD	OHC	LL 機能	その他	無回答	計
動画	クラス C1	6	4	6	1	1	5	0	1	24
	クラス C2	5	2	2	1	0	2	1	2	15
	%差	-0.6	0.7	1.9	-0.2	0.6	1.3	-0.8	-1.1	1.8
音声	クラス C1	*10	6	8	2	1	6	0	2	35
	クラス C2	*11	1	3	0	0	1	0	1	17
	%差	-3.2	2.7	2.2	1.2	0.6	2.7	0	0.3	6.5
聞取訓練	クラス C1	*9	6	7	1	1	7	0	3	34
	クラス C2	*13	4	7	1	0	2	1	4	32
	%差	-5.5	0.2	-1.7	-0.2	0.6	2.4	-0.8	-1.6	-6.6
仮想対話	クラス C1	3	2	3	1	1	3	0	1	14
	クラス C2	3	0	2	0	0	1	0	2	8
	%差	-0.7	1.2	0.1	0.6	0.6	0.9	0	-1.1	1.6
仮想旅行	クラス C1	2	2	1	1	0	2	0	0	8
	クラス C2	3	0	1	0	2	1	0	3	10
	%差	-1.3	1.2	-0.2	0.6	-1.7	0.3	0	-2.5	-3.6
タイピング	クラス C1	1	2	2	1	0	1	0	0	7
	クラス C2	3	1	1	0	0	0	0	1	6
	%差	-1.9	0.3	0.3	0.6	0	0.6	0	-0.8	-0.9
自学自習	クラス C1	6	5	4	0	1	4	0	0	20
	クラス C2	7	1	2	0	0	0	0	0	10
	%差	-2.3	2.1	0.7	0	0.6	2.3	0	0	3.4
実力テスト	クラス C1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クラス C2	1	1	1	1	0	1	1	0	6
	%差	-0.8	-0.8	-0.8	-0.8	0	-0.8	-0.8	0	-4.8
インターネット	クラス C1	7	5	6	1	2	5	0	0	26
	クラス C2	7	2	4	1	0	1	1	1	17
	%差	-1.7	1.3	0.2	-0.2	1.2	2.1	-0.8	-0.8	1.3
判らない	クラス C1	1	1	1	0	0	0	0	0	3
	クラス C2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0.6	0.6	0.6	0	0	0	0	0	1.8
その他	クラス C1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	クラス C2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	%差	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	クラス C1	45	33	38	8	7	33	0	7	171
	クラス C2	53	12	23	4	2	9	4	14	121
	%差	-17.5	9.4	3.2	1.4	2.4	11.9	-3.3	-7.5	0

上位2項目は、両クラスとも全く同じ「ビデオ&音声」「ビデオ&聞き取り」である。人数比的に目立つのは「ビデオ&聞取訓練」が 5.5 ポイント増を示している点のみで、これも、調整残差で見ると、クラス C2 において -0.42 であり、関連性はほとんどない。全体的に見ても、クラス C1 において有意性を示す項目は一つもなく、クラス C2 においては「OHC & 仮想旅行」（調整残差 4.75）のみである。後者の実数は 2 人であるが、これも、「フランスへ行きたい」者が「生データに触れたがっている」とも解釈できる。しかしながら、3-1-7-4. で示された関連性は現れていないため、この解釈も恣意的な可能性が

強い。

弱い関連性を示す項目は、クラス C1 で「無回答&聞取訓練」(調整残差 1.56)、クラス C2 で「ビデオ&音声」(調整残差 1.87)「ビデオ&自学自習」(調整残差 1.74)「MD &実力テスト」(調整残差 1.88)「その他&実力テスト」(調整残差 1.88)「無回答&仮想旅行」(調整残差 1.90)である。「MD &実力テスト」「その他&実力テスト」はいずれも実数 1 人であり、3-2-7-3.にも現れた同一人物であった。この回答者は、OHC 以外の機器を全てもっと利用してほしいと回答しており、そのときも指摘したように、コンピュータに馴染んでいない様子が窺われる。この両項目を除いた実数は、いずれも 3 人以上であり、何らかの関連性を論じられそうである。

まず、クラス C1 の「無回答&聞取訓練」において、「無回答」は、まだ何一つ CALL 教室の機器を利用していないにも拘らず、「コンピュータ以外の機器はさほど利用せずともよい」の意味か、あるいは単に「判らない」の意味であると考えられる。前者であればコンピュータに関心のある者は、聴解能力を重要と考えていることになり、後者なら、何はともあれ聴解能力を磨きたいと思っているということになる。どちらであるかを考えると、上の 3-2-7-3.では有意性が見られなかったが、クラス C1 における「コンピュータ&聞取訓練」の実数が 10 人と比較的多いことから、前者である可能性が高い。しかしながら、この項目は、クラス C2 においては、実数こそ 1 人増で 4 人となるものの、有意性を失う(調整残差 0.19)。クラス C2 における「無回答」は、ほとんどの場合、「コンピュータ以外の機器はさほど利用せずともよい」の意味であると考えられるため、コンピュータばかりによる「聞取訓練」には、些か飽きたのかもしれない。

クラス C2 の「ビデオ&音声」は、コンピュータに「音声再生マシン」を期待する者はビデオを選択するということであるが、これは実はコンピュータにたいする関心の浅さを示しているように思われる。ビデオというのは、もっとも一般的に選択されやすい機器だからである²⁰⁾。これにたいし、「ビデオ&動画」(調整残差 -0.87)には有意性が見られない。これは、「動画」を選択している者はビデオに限らず他の機器も選択しているため、より「マニアック」なのかもしれない²¹⁾。

また、「ビデオ&自学自習」は、ここでも「自学自習」を「ドリル・マシン」と捉えることで、「一般的・コンピュータに馴染みの薄い」回答者の姿が浮かび上がる。

「無回答&仮想旅行」は実数 3 人であるが、クラス C1 では 0 人であった項目であり、変化としては有意かもしれない。先に述べたように「無回答」=「コンピュータのみ利用」と捉えるなら、コンピュータに関心の深い者は、テクノロジーに夢を託すとも考えられるわけである²²⁾。

先にクラス A・B において、このクロス集計では関連性が見いだしにくいと結論したが、クラス C1・C2 では、若干ながら関連性を見いだし得た。ただし、クラス C1 からクラス C2

への変化については「ビデオ系」の増加を確認したにとどまる。これは畢竟、クラス C ではビデオを利用する機会が少なかったことの反映であって、CALL 授業との連関とは考えにくいと云えよう。

4. まとめと課題

今回の調査の結果、およそ次のような点が指摘できよう。

- (1) 単純集計の結果、授業に望む内容にかんしては、CALL 授業前期受講終了時点での意識と後期受講終了時点での意識はほとんど変わらない。ただし、若干ながら、「AV 機器の多用」にたいする希望が増えている。
- (2) 授業に望む内容について、前期受講直前と前期受講終了時点では意識に変化がみられるが、それは実際に行なった授業内容の影響が大きい。
- (3) ただし、授業の内容と満足度には関係が認められない。
- (4) コンピュータの利用の可能性については、前期受講終了 後期受講終了でも、前期受講直前 前期受講終了でも変化はみられず、基本的に「音声」「聞き取り訓練」に役立つと認識されている。
- (5) 当然のことながら、CALL 授業は、受講生にたいし、コンピュータの利用法にかんする具体的イメージを与えることになるが、コンピュータに馴染めなかった受講生は、一般的なイメージしか抱けない。
- (6) コンピュータ以外に利用してほしい機器は、もっぱらビデオである。これは、「動画」も提示した CALL 授業の経験の度合いには無関係なので、「映像」という形式ではなく、「映画」などの内容を指しているように思われる。

以上の点を踏まえて、受講生たちの CALL 授業の期待と評価についてまとめると、至極当然のことながら、彼らにとって、コンピュータそのものは CD プレーヤなどと同列の「道具」でしかなく、自らの希望する「音声面の学習」にかんして期待通りのものであった、ということになる。そもそも、コンピュータ自体が「外国語をより良く学習するための単なる道具」であると考えれば、この結果はまったく妥当なものである。自由記述欄の「長所」に挙げられた記述は、「楽しい」という評価が圧倒的であり、また「自主的な勉強ができる」といった評価もみられ、取り敢えず受講生に好評であることは確かだが、この結論には不満が残る。

CALL の大きな特徴は「インタラクティブ」と「ネットワーク」であり、これは受講生の「能動性・自主性」を引き出してしかるべき装置である。実はこの点こそが外国語学習に活かされるべきであり、コンピュータは単なる「黒板」「プリント」「AV 機器」の「代用品」ではなく、最終的には、それを使って受講生自身が学習法を創出するような「知恵の実」で

なければならない。教師は単なる助言者となり、受講生たちが自ら編み出した学習法で外国語を身に付けてゆく。これが筆者にとっての理想的 CALL 授業なのである²³⁾。勿論、コンピュータを、受講生に受け身を強いる「単なる道具」に貶めているのは、現在の筆者の CALL 授業である。今後、如何にして「知恵の実」に転換してゆくか、課題は大きい。

最後に、今回まで使用した調査票は、データ解析向きではない。経年比較のために調査票の項目には手を加えずにきたが、次回からは、データ解析の面からもっと工夫を凝らさねばならないであろう。また、受講生の心裡を測る自由記述を増やすなどして、きめ細かい調査を行なう必要があることは言うまでもない。

【注】

- 1) 大阪市立大学学術情報総合センター内にある、この CALL (Computer Assisted / Aided Language Learning [ALAO (Apprentissage des Langues Assisté par Ordinateur)]) システムを備えた「LL 実験室」の詳細にかんしては、福島(1996)を参照されたい。
- 2) Macintosh の Hyper Card を用いた自作ソフトなどの報告や、それらを用いた結果のアンケート報告などはいくつか存在する。
- 3) 最後に掲載するアンケート全体をご覧頂ければお判りのように、質問項目はフランス語の授業全般にかんするものであり、CALL に関係するのはその一部である。なお、筆者は、同内容のアンケートを 1997 年度の後期から継続して実施し、5 クラスにたいし、合計 6 回行なっている。他クラスのアンケート結果については、福島 (1998, 1999) に報告している。
- 4) クラス B に再履修者、すなわち 2 回生がひとり、クラス C にフランス語を学ぶのは初めてという 4 回生がひとりに籍したが、あとは全て 1 回生ばかりである。この 2 回生は、前年度も筆者のクラスで、かつ CALL 授業を一年間受講している。
- 5) 大阪市立大学の全学共通教育における「情報処理教育」は Unix OS の一種である Next Step で動くコンピュータを用いる。
- 6) LL 実験室の詳細にかんしては、福島(1996)を参照されたい。
- 7) 「新修外国語」と一括して称している。
- 8) Hyper Text Markup Language の略。通常、インターネット上の所謂「ホームページ」、すなわち Web Page はこの方式で記述される。
- 9) Mac 標準搭載のソフト。マウスでクリックすることにより、さまざまなイベントを発生させることが出来る。作成されたものを「スタック」と呼ぶ。この授業用のスタックの作成には、TA(Teaching Assistant)の大学院生にあたってもらった。
- 10) HTML の新形式。従来の HTML と異なり、「内容」と「見え方」をはっきり分けて記述するようになった。
- 11) Web Page に、単に見るだけではなく、相互作用性 interactivity を付与できるスクリプト言語。ただし、これについてもブラウザ・ソフト間での互換性は保たれていない。
- 12) Portable Document File の略。Adobe Systems 社の開発したクロス・プラットフォームな文書ファイルの形式。Unix Windows Mac OS/2 の各プラットフォームに対応する。基本的に、どの OS 上でも文字化けやデザイン上の変化を起こさず書式を保つことができる。
- 13) Real Networks 社の開発した音声・動画の圧縮形式。音質・画質を落としてファイルサイズを圧縮、ネットワークに負荷をかけずに済むため、インターネット上で多くのコンテンツに用いられる。
- 14) 音声圧縮方式 MPEG 1 Audio Layer-3 によるファイルの拡張子に由来する呼称。なお MPEG (Motion Picture Experts Group) とはデジタル動画の圧縮・伸張規格のこと(たとえば DVD は MPEG 2 を用いる)。CD の音声データをほぼ劣化なく吸い出すと 10MB/分ほどになるが、MP3 ファイルにすれば、かなり高音質のままデータを 1/10 にすることができる。ただし音質的には

MD に劣る。CD から MP3 ファイルを作るためのソフトやそれを再生するソフトは、インターネット上に多く公開されている。再生ソフトも Unix、Windows、Windows CE、Mac に対応したものが作成・公開されており、それぞれのプラットフォーム上で MP3 ファイルを聞くことができる。なお Mac 上での再生には MacAmp というソフトを用いた。

- 15) Windows 98 は MP3 ファイルを標準で再生できるが、Mac は自社の Audio Visual 再生ソフトである Quick Time が Version 4 になって初めて MP3 に対応した。これにより、ようやくブラウザ・ソフト上での MP3 再生が可能となったわけである。
- 16) 西村則久氏が、慶應大学の修士課程のときに作成したソフト。Oracle Media Objects の Player を用いて動くため、Win と Mac の両プラットフォームに対応する。出題する問題は、テキストファイルで記述することにより、自作可能。元来英語用だが、仏・独語にも対応している。このソフトのユニークなところは、独自の記述言語を持ち、それによって作文にありがちな解答のヴァリエーションをすべて正答と出来ることにある。また、誤答箇所も、ちゃんと指摘してくれる。CGI と Java を用いる Web 版もある。(cf. 西村 1999)
- 17) 答えの数(人数)を、その問にたいする回答数全体で割ったもの。
- 18) クラス A の% - クラス B の%の差を求めた。すなわち、後期に増えればマイナスとなる。
- 19) 「実測値 - 期待値」の差(残差)が十分に大きければ、統計上有意であると云い得る。それを項目ごとに確かめるために調整したもの。1.96 以上なら危険率(結論が誤りである確率)5%、2.58 以上なら危険率 1%の有意とされる。
- 20) 3-1-7.4.では言及しなかったが、クラス A における「ビデオ&音声」の調整残差は 1.55、クラス B においては 1.11 で、わずかながら関連性を示しており、この項目が一般普遍的であることの、若干の証左となっている。
- 21) なお、表には挙げなかったが、「コンピュータの利用可能性」どうしのクロス集計も行っており、その結果、クラス C1・C2 とも有意な項目はないが、クラス C1 では「音声&聞取訓練」「音声&タイピング」「聞取訓練&自学自習」「仮想対話&仮想旅行」が、クラス C2 では「仮想対話&仮想旅行」弱い関連性を示した。
- 22) ごくわずかながら、「無回答&仮想対話」も関連性を示す(調整残差 1.23)。
- 23) ウィトゲンシュタインが「痛みという語表現は泣き声にとって代わっているのであって、それを記述しているのではない」(WITTGENSTEIN 1953:178)と指摘するように、言葉は「気持ちの表現道具」ではなく「気持ちそのもの」である。つまり、外国語を身に付けるということは、「心の裡なる思考を外国語に置き換える」能力を身に付けることではなく、「外国語で思考=表現」できるようになることなのであり、CALL 教育における筆者の目標は、この考えを CALL に敷衍したものである。

【参考文献】

- CHANIER, Thierry (1998): Hypertexte, hypermédia et apprentissage dans des systèmes d'information et de communication, in *Études de linguistique appliquée*, 110, Didier Érudition: 137-146.
- WITTGENSTEIN, Ludwig (1953): 『哲学探究』ウィトゲンシュタイン全集 8[藤本隆志], 大修館書店, 1976 .
- 菅 民郎(1998): 『すべてがわかる アンケートデータの分析』現代数学社 .
- 三枝 裕美(1997): CALL で語学教育がどう変わるか [Online Available: 1999/07/16] <http://130.54.80.161/MM/CAsaigusa.html> .
- 西村 則久(1999): サツと英作! Web ページ [Online Available: 1999/07/16] <http://www.chi.mag.keio.ac.jp/~bud/eisaku/satto.shtml>
- 福島 祥行(1996): CALL 教室の展望と課題, 『TLLMF』7, 大阪市立大学大学院文学研究科 TLLMF 研究会: .43-54 .

- 福島 祥行(1998): パイロットクラスにおけるアンケート報告, 『平成9年度学術情報総合センターLL 実験室使用実績報告書』大阪市立大学学術情報総合センター・大阪市立大学文学部: .10-16 .
- 福島 祥行(1999): パイロットクラスにおけるアンケート報告, 『平成10年度学術情報総合センターLL 実験室使用実績報告書』大阪市立大学学術情報総合センター・大阪市立大学文学部: 12-22 .
- 福島 祥行(1997-1999): CAI 教材室 [Online Available: 1999/07/16] <http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/~fukushim/francais/call/>
- 藤田 耕司(1997): CALL による外国語教育: 意義と課題 [Online Available: 1999/07/16] <http://130.54.80.161/MM/CAfujita.html> .

【資料】

外国語教育に関するアンケート

現在の新修外国語に関して

1 履修方式

1-1 履修決定までの期間について

- 1.長すぎる 2.短すぎる 3.現在のまゝでよい 4.開講前に決定すべきだ

1-2 履修単位について

- 1.多すぎる 2.少なすぎる 3.現在のまゝでよい

2 科目

- 1.現状でよい 2.「会話」「講読」のやうな科目を別個に設けるべきだ 3.その他

[]

3 授業に望むこと(複数回答可)

1. AV 機器を多用してほしい 2. ゲーム要素を取り入れてほしい 3. 文法に力を入れてほしい 4. 発音に力を入れてほしい 5. 練習問題に力を入れてほしい 6. コンピュータを活用してほしい 7. 実際のフランス語のテキストの読解力養成に力を入れてほしい 8. ヴォキャブラリーを憶えさせることに力を入れてほしい 9. 厳しく教へてほしい 10. 優しく教へてほしい 11. その他 []

4 LL 実験室の授業について

4-1 コンピュータ使用の授業内容について

1. かなり面白い 2. やゝ面白い 3. Comme ci, comme ça 4. あんまし面白くない 5. ちっとも面白くない

4-2 TA(Teaching Assistant) について

1. 必須 2. みた方がよい 3. どちらでもよい 4. 不要 5. 判らない

4-3 コンピュータ利用について

4-3-1 利用の可能性(複数回答可)

1. 動画 2. 音声 3. 聞き取り訓練 4. 仮想対話 5. 仮想旅行 6. タイピング 7. 自学自習補助 8. 実力テスト 9. インターネット 10. 判らない 11. その他 []

4-3-2 現状の利用について

1. もっと使ひ方があると思ふ 2. 現状でもかなり使つてゐると思ふ 3. 判らない

4-3-3 もっと利用してほしいその他機器(複数回答可)

1. ビデオ 2. LD/DVD 3. CD 4. MD 5. 実物投影機(OHC) 6. LL 機能 7. その他 []

4-3-4 LL 実験室について

・長所:

・短所:

・その他